

「在日ブラジル人と関わる日本人は精神的側面に対しどのような影響を受けているのか」

ーインタビュー調査による探索的質的研究

How is the Mental Well-being of Japanese People who Interact with Brazilians Living in Japan affected?:

A Qualitative Exploratory Study

北部 梨奈 (京都大学大学院 医学研究科)

RINA KITABE (Kyoto University Graduate School of Medicine)

キーワード：ホスト国の人々への影響、つながり、精神的健康、在日ブラジル人、質的研究

## 1. 背景

日本における在日外国人の数は、令和5年6月末時点で過去最高の322万3,858人(出入国在留管理庁,2023)を記録した。各地で発生する争いや異常気象、経済的困窮などの要因から地球規模での人口移動が加速しており、今後も更に大規模な移住が発生する可能性があると言われている(World Economic Forum,2023)。新規移住者のみならず、初期移住者、呼び寄せ、移住先で生まれ育った世代が既に混在しており(望月,2022)、単に外国人として捉えるにはあまりにも多様なアイデンティティを有した人々と既に共生している状態と言える。日本においても経済や社会学の観点では、賃金や雇用など経済効果による影響や、オールドカマーに対する受容態度や排外意識に関する研究があり(吉永,2018)、多文化共生に対する意識調査(千頭,2021)なども蓄積されている。その結果、在日外国人への受容態度が年齢や性別により異なり、在日外国人に対する意識には歴史的政治的な要因も関係していることが明らかになっている(Zhang,2018)。また、在日外国人に対する受容度は生活満足度や幸福感が高いことと相関しており、自己や自文化への理解を深められるポジティブな影響も明らかになっている(坂本,2013)。公衆衛生や医学分野では、各国における移民が異文化適応のストレスからメンタルヘルスの問題を抱えやすいことは知られており(Balidemaj,2019)、在日外国人のメンタルヘルスに対しても、「言語的問題」「女性であること」「社会的支援の欠如」が負の要因であり、「ソーシャルネットワークの量」「文化的アイデンティティ」がポジティブな要因であることが明らかになっている(Miller R,2019)。しかしながら、オールドカマーとブラジルをはじめとする南米出身の在日外国人では異なる特徴が確認された。出入国在留管理庁が行った令和4年度公表の基礎調査報告書から、ブラジルをはじめとする南米出身者らはオールドカマーと比較して、人々のつながりに関する質問へ「孤独」と回答する割合が低い傾向にあった。国籍だけでその特徴や現状を捉えることは出来ないが、特にこうしたポジティブな影響や「強み」が目立ったブラジルに焦点を当てたい。なぜなら、問題点や課題と同様に「強み」にも関心を向けた研究が心理学分野だけでなく精神医学分野まで広がり、メンタルヘルスを支える「ポジティブサイコロジー」(須賀,2019)として注目されつつあるからだ。しかし、在日ブラジル人<sup>注1</sup>と交流する日本人に与える影響は研究が十分ではなく、在日ブラジル人が日本人の精神的側面に与える影響についても明らかになっていない。

## 2. 目的

本研究の目的は、在日ブラジル人と関わり続ける日本人が、精神的な側面に対してどのような影響を受けているのかを探索的に理解することを目的とする。ホスト国側の人々の精神的側面を垣間見ること

で、彼ら・彼女らの存在がホスト国社会の生活や日常にどのように寄与しているのかを検討する一助になることを期待する。

### 3. 研究方法

2023年7月から各地域の在日ブラジル人コミュニティに継続して参加している日本人をスノーボールサンプリング式にリクルートし、1対1での半構造化インタビューを1時間程度実施している。データの分析には Steps for Coding and Theorization (SCAT) (大谷,2019) を用いて理論記述の生成を行うことを最終目的とした。また、各地域でのフィールドワークの観察やメモもデータとして活用する。尚、本報告は研究実施者である筆者が修士論文のために実施した調査の中間報告である。

### 4. 結果・考察

日本における在日ブラジル人は集住地域に住む者が多いが、今回のインタビューはその集住地域周辺に住む者だけではなく、様々なコミュニティや団体においてブラジル人らと積極的に多様な関わり方をする20代から70代の日本人20名を対象に実施した。インタビューの特徴としては、年齢差による明らかな偏見や差別意識の顕在化はなく、経済的余裕の関連も目立たなかったが、学歴が比較的高いことは先行研究と一致していた。そして各県のブラジル人口密度などの地域差以上に接触年数や関わり方により異なる結果が得られた。教育やビジネスの場での関わりに困難さやストレスを感じる場面が多い一方で、生活や日常の一部での関係においては無意識のうちにリラックス感を得ている場面も散見された。さらにインタビューの背景として海外在住経験がある人は半数未満であり、経験的な基盤の有無による大きな差は見られなかった。

得られたデータから大きく2点の分析を試みた。第1に精神的な側面から、ポジティブかつ現実主義な彼ら・彼女らとの関わりから、意味のある生き方の自認を経て思考や行動レベルの転換そして精神的安心感に繋がることが推察された。第2に社会的な側面では、在日ブラジル人の持つ深い強固な繋がりが、彼ら・彼女らと関わる日本人にも波及しつつなかりを実感出来ていることが示唆された。一方で、彼ら・彼女らとの関わりを持たない者との分断の発生にも影響している可能性が考えられる。今後は更なるSCATの分析を進め、より深層部の意味を見出すことで双方の強みを活かしうる理論記述の報告が必要と考える。

### 5. 主要参考文献

Miller R, Tomita Y, Ing Cherng Ong K, Shibaura A, Jimba M.2019 「Mental well-being of international migrants to Japan: a systematic review」 『BMJ Open』 9(11).

永吉希久子.2017 「日本の排外意識に関する研究動向と今後の展開可能性」 『東北大学文学研究科研究年報』 66:164-143.

千頭聡, カースティ祖父江.2021 「住民意識から見る多文化共生に向けての現状と課題」 『知多半島の歴史と現在』 25:16-42.

Zhang Jie.2018 「The Less Favored Foreigners: Public Attitudes toward Chinese and South Korean Residents in Japan」 『アジア太平洋討究』 33:205-217.

須賀英道.2019 「ポジティブサイコロジー理論によるポジティブ精神医学への発展」 『精神神経学雑誌』 121(9):700-707.